



Title	<雑誌紹介>雑誌”TOPOS”とランドスケープデザイン
Author(s)	足立, 裕司
Citation	デザイン理論. 1995, 34, p. 154-156
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53072
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

雑誌“TOPOS”とランドスケープデザイン

足立 裕司／神戸大学

モダニズムが論理の自律性を求めて様式建築を否定したとき、同時にその周縁にあった庭園の伝統にも終符が打たれた。幾何学式庭園や自然式庭園は過去のものとなり、ミースのイリノイ工科大学やベルリン国立美術館のように建物の周辺は広々とした均質な広場として建物の自律性を強調することになった。ル・コルビュジエの手にかかれれば庭園は地上から屋上へと引っ越しさせられ、ピロティで持ち上げられた地面は開放されることになる。都市にも延々と続く草原のような空間が出現することになるのである。代わって屋上に移動した庭園には閉ざされた利用者のために意外にも伝統的な香りのする空間が用意された。

しかし、そうした理想都市とは異なり、実際に現れた20世紀の都市空間は建物と建物の間に挟まれた負の空間ともいべき空白を生み出してきた。それでも人さえ集まるなら、ベンチと木陰さえ用意すれば何とか様にはなっても、人がいなくなるといかにも寂しいものであった。

高層建築の集合する都市を世界に先駆けて造りだしたアメリカという土地に、これも世界に先駆けて近代的なランドスケープ・デザインが根付いたのも不思議ではないのかもしれない。セントラルパークを構想したオルムステッドのような人が生まれてくる素地がもともとあったともいえる。ヨーロッパのような歴史的建築物や庭園による潤いがない土地に、せめて広大なオープン・スペースを確保するという発想や建物の専有した残りの敷地や建物間の空間を大事にしようというより切実な発想が生まれてくるのも自然の成り

行きであろう。

それに比べ日本では、都市の建物の間を大事だと考える発想に欠けていたように思われる。建物自体は世界に紹介されるような素晴らしいものであっても、その回りはいかにも貧相なものが少なくなかった。それは、周りを充実させようという発想がなかっただけでなく、むしろ邪魔者扱いにしてきた嫌いもあるのではないだろうか。また、たとえあったとしても、箱庭型に閉ざされた伝統的な庭園を造りだしてきた。

その意味ではヨーロッパにしても日本にしても長い庭園の歴史をもちながら、近代都市に必要なランドスケープ・デザインには極めて疎い土地柄であったともいえるだろう。しかし、モダニズムの限界や欠点が指摘されるなか、ランドスケープ・デザインに期待が集まり、興味が集中することになる。70年代ころからエクボやリンチの著作が盛んに読まれ、ローレンス・ハルプリンやピーター・ウォーカーなどのデザインが流行することになったことは記憶に新しい。ランドスケープ・デザイン界のルイス・カーンともいべきダン・カイリーも安直に模倣されることになる。

しかし、日本でのランドスケープ・デザインの質や思想に問題はあっても、従来残余の空間として扱われてきたところに関心が集まることは歓迎されるべきことだろう。最近ではランドスケープ・デザインの立場から敷地の関係性が決定され、建築家がそれに従うという例もみられるようである。起死回生とはいかないまでも、建築家とランドスケープ・デザイナーとの協力は都市空間の今後を考え

る上で必須のものとなるだろう。

ここで取り上げる“TOPOS”という雑誌はこれまでのアメリカ発のものとは違って、ミュンヘンで発行されており、ヨーロッパのランドスケープ・デザインの潮流を伝えるものとして注目される。これまでもパリのグラン・プロジェやイタリアのアルド・ロッシのような個性的なデザインはみられたが、そうした動向を窺うことができる雑誌として興味深い。創刊号は1993年に発行され年数回の不定期の出版である。内容はドイツ語と英語の対比で構成され、写真や図版、装丁も優れている。毎回特集が組まれ、その内容は次のとおりである。

- 1号 (1992年9月) ヨーロッパのランドスケープ・デザイン
- 2号 (1993年1月) モダニズムの影響
- 3号 (1993年5月) 形成されるランドスケープ
- 4号 (1993年8月) 空想のランドスケープ・デザイン
- 5号 (1993年12月) 都市のオープン・スペース
- 6号 (1994年3月) 文化としてのランドスケープ・デザイン
- 7号 (1994年7月) 仕事と住まいのためのオープン・スペース

テーマの設定は着実でしかも現在の問題の核心を衝いたものとなっている。執筆者は主としてヨーロッパのランドスケープ・アーキテクトや建築家などであるが、従来のランドスケープ関係の雑誌と異なるのは、一気に環境問題や社会問題へと関係付けるのではなく、特に建築デザインや思潮との関連を重視していることである。先に、ヨーロッパはランドスケープ・デザインに疎いと言ったが、むしろ自然指向型や歴史的環境を重視した外部環境の形成には昔から積極的であった。そうし

た傾向を紹介するのが従来の雑誌であるとする、この雑誌はその狭間にあるデザインの質にも関心を向けながら編集されていることが評価される。

もう一つのこの雑誌の魅力は、ヨーロッパのランドスケープ・デザインが職能や職域として完全にまとまっていなかったことから、逆に投稿者の多様な人材構成を可能としていることである。ドイツや北欧のように比較的職能が安定しているところや、イタリアやフランスのように建築家や彫刻家等が担っているところが、デザインという共通の視点から取り上げられ、編集されているところが面白い。問題を絞りこみ、テーマを設定していく編集者の力量に負うところも大きいのであろうが、われわれ建築を専門とする者にとっても示唆に富む雑誌である。

これまでのテーマのなかでも、2号の「モダニズムの影響」は興味深い。ル・コルビュジエの理念やバウハウスの空間理論など、未だにランドスケープ・デザインに大きな影響力をもつモダニズムの意味が検証されている。近代建築を単に作品として見るのではなく、その広がりをも含めた環境形成としてもう一度問い直してみることは、モダニズムそのものを再考する上でも重要な作業であろう。U. ポプロツキの「モダニズムの迷走的展開」はそうした事情を追跡している。

また、デザインそのものとしてみるなら、この2号に取り上げられた事例に限らず、モダニズムはヨーロッパのランドスケープ・デザインにおいては未だに健在であるように思われる。それは、ランドスケープ・デザインの助けを必要とする近代都市においては土着性や地域性といったことがそれほど重視されないことが考えられる。また、ポストモダンともいべきデザインに比べると、共通の基盤として受け入れられる余地が大きく、その

意味では広く市民の眼に触れ、利用されることの多いランドスケープ・デザインには向いていることも指摘できるだろう。外部空間の欠如ともいべきモダニズムの形成期に対して、そのデザイン言語は利用しながらモダニズムに欠如していた空白を補完しているかに見える。

この他、写真や絵画に現れたランドスケープをテーマとした4号など図版だけでも資料性の高い雑誌である。是非、一度ご講読をお

勧めしたい。なお、この拙文を遅れながらも書き終えたところ、丁度『日経アーキテクチュア』（9月18日）のランドスケープ・デザイン特集が届いた。そのなかにこの『トポス』の編集者・ロベルト・シューファーのインタビュー記事が丁度掲載されていたので紹介しておく。1号の特集にあるヨーロッパの近年のランドスケープ・デザインも掲載されているので併せて参考にして頂きたい。